

## 疑「偽古文尚書」考(中)

次に清朝では、まず閻若璩(一六三八年—一七〇四年)を挙げねばならない。

彼はその著「尚書古文疏証」(以下「古文疏証」と略称する)で、完膚なきまでに「偽古文尚書」と、それに付せられた「偽孔伝」の偽をあばいたとされる。もちろん、彼に先行する人物が梅賾をはじめとして幾人もおり、彼はある意味ではそれら先人の開拓した路の上を進んだともいえるであろう。そこで、「古文疏証」の独自性を検証するために、たとえば梅賾の「尚書考異」と閻若璩の説とがどこまで重なるかということも、看過できない問題の一つである。

また、閻若璩が畢生の力を注いだ「古文疏証」が、その当時の人々のみならず後代にまで与えた衝撃と影響は、極めて大きく、同一の問題を論じ、ほぼ同じ結論に達していた梅賾が時代に投じた波紋とは、比較にならないものがあることは、既に本稿の(上)でも触れたとおりである。そこに、一人の学者と、その生きた時代との関係がもたらす運・不運を見ることができようが、それらの問題はひとまず置いて、本稿では前稿を受け継いで、閻若璩が偽古文・偽孔伝の作者についてどのような見解を示しているか、一瞥してみよう。まず「古文疏証」の中で、閻若璩がこれについて言及している代

表的なものを取りあげてみる。

### その一

漢代伝来の古文尚書は、細々と秘府に伝えられてきた。それが永嘉の喪乱によって「亡びてしまった。もし秘府にその書があれば、誰かに仮託して偽作するものがないとも、秘書と校合することで、立ちどころにその偽が露見するであろう。あたかも漢の成帝のとき古文書を修める者を徴し、張霸が百兩篇の尚書をもって応じたが、宮中の秘書とつき合わせて、それが正しくないと判明したように(漢書儒林伝による)。そこで東晋の元帝のとき、宮中の秘書がまだありせば梅賾がたてまつるところの伝の偽を突き止めるのは、困難であつたはずはない。(第二章)

この条を見た限りでは、閻若璩は梅賾偽作を明言するものではないものの、それを前提として論を立てているようである。しかし詳細に「古文疏証」の全文を見てゆくと、彼は必ずしも梅賾偽作説をとっているのではないことがわかる。

野村茂夫

(東洋学教室)

## その二

郭璞の爾雅注は、晋の何年に作られたものか詳らかにしないが、注には元康八年（二九八年）・永嘉四年（三一〇年）の事を引くが、一も東晋の元帝・明帝の年号に及ぶものはない。そこで、これは渡江以前に成ったものとわかる。当時、孔書（偽古文尚書および偽孔伝）はまだ学官に立てられていなかったが、すでに世間には広く行われていた。そこで爾雅の注では太甲中篇を引いて「俟我后」（釈詁）といい、尚書孔氏伝を引いて「共為雌雄」（釈鳥）といい、また「犬高四尺曰獒」（釈畜）といっている。

歎かわしいことに、偽書が容易に人を惑わし、人はそれによって論を立てるものが多い。ひとり皇甫士安（謚）がこれを帝王世紀にとり入れただけでなく、郭璞のように古文奇字を好む者までもが欺かれていた。（第八十九章）

これを見ると、閻若璩は偽古文の成立年の下限を明示しており、すくなくとも永嘉の乱による南渡、そして東晋成立（三一七年）以前には出来上っていたとするものである。また皇甫謐（二一五年～二八二年）もこれを見ていたというのであるから、この条による限りでは、南渡以後になって梅賾が偽作したということは、閻若璩の考えにはなかったことになる。

このように、西晋以前に偽古文尚書が存在したとすれば、ではその作者は誰か、ということになる。そこで、いま名前のあがった皇甫謐、この人物と偽古文尚書との関係についての、閻若璩の見解をみてみよう。

その前に一言触れておかねばならないのは、（上）で述べたようにすでに明の梅賾が「尚書考異」において、皇甫謐偽作説をとって

いることである。もっとも、（上）でもみたように、梅賾の皇甫謐説は、あまり説得力のあるものではなくて、四庫提要も根拠薄弱とする程度のものであるが。

さて、閻若璩は皇甫謐と偽古文尚書との関係について、次のようにいう。

（堯典正義に引く晋書によると）梅賾はこれ（古文尚書）を臧曹から得た。曹はこれを梁柳から得、皇甫謐もまた柳から得て、帝王世紀に載せている。柳は蘇愉から得、愉は鄭冲から得た。その鄭冲以前はどこから伝わったものかわからない。……私がおもうに、梅氏の晩出の古文尚書が東晋に出てから今年壬子の年（一六七二年）に至るまで、千三百五十六年間にわたって他の経書と並んで学官に立てられ、人々はこれを誦してきた理由は三つある。

として、その最初に皇甫謐をとりあげて、

皇甫謐は高名の宿学で、左思の三都賦も彼の短い序をもらって、はじめて評判になったほどである。その彼が実際に孔安国伝来の尚書というものを手に入れて、それを帝王世紀に載せたのであるから、当時その尚書を重んじない人があるはずはない。このように、この偽書をして世に信ぜしめたはじめは、皇甫謐の過ちである。……以下略……（第十七章）

このように、閻若璩は皇甫謐偽作説はとらないものの、堯典正義というところの梅賾提出の古文尚書の伝承については、信じているのである。してみれば、閻若璩が梅賾偽作説をとっていないことは、明らかであろう。

### その三

このように、閻若璩は堯典正義にいうところの古文尚書の伝承の系譜を信じていたようであるが、次の文もそれを前提として述べられている。

蔡邕の独断には、後漢明帝（五十七年～七十五年）の詔として、有司は尚書皐陶謨にもとづいて晁胤の形式を制定するようにといふのを引いているが、今の尚書ではそのもとづく所の制の文は益稷篇にある。これは偽古文尚書が出る以前のことで、皐陶謨・益稷の二篇が一つであったからである。また光武帝（二五年～五十七年在位）の時に張純は「唐堯の典に遵って二月に東に巡狩するよう」と奏し、章帝（七十六年～八十八年在位）の時に陳寵は「唐堯典を著して『眚災肆赦』』という。これらはいずれも現在では舜典に入っているが、当時は舜典と堯典とが合体していたこと、言うまでもなからう。

ところで晋の武帝（二六六年～二九〇年在位）の初め、幽州の秀才の張髦が上疏したとき「肆類于上帝、歸格于芸祖」までを引用して堯典の言葉とした。これも現在では舜典にある。これはその当時すでに偽古文尚書は出現していたが、まだ学官に列していなかった。そこで臣下の上奏文も敢てそれに拠って説を立てなかったのである。（第六十六章）

この見解によると、閻若璩は西晋初めの武帝の時に、既に偽古文は存在していたとするのである。先の堯典正義にいう古文尚書伝承の系譜は、鄭冲から始まるが、彼は武帝と同時の人である。これをみて、やはり閻若璩はあの系譜をそのまま正しいものと信じていたに相違なからう。

### その四

春秋左氏伝（定公四年）に衛の祝佗の言葉としていう。「管・蔡、商を啓きて王室を甚間せば、王、管叔を殺して蔡叔を蔡につ、車七乗徒七十人を以てす。其の子蔡仲行いを改め、徳に帥いしかば、周公これを挙げて己の郷土と爲し、これを王に見えしめて、これに命ずるに蔡を以てせり」と。

これは、成王が管叔を殺したが、周公はそれを救うことができなかった。そこでその子に恩を及ぼしたのである、ということである。そのいきさつは極めてはっきりしている。ところが杜預（二二二年～二八四年）はこれを解釈して、周公が王命によって（止むなく管叔を）殺したのである、とするが、これは周公が兄を殺したという過ちをかげうため（このような解釈をするの）であって、実は周公はもととも兄の管叔を殺してはいないのである。（このような誤解が生じたのは、杜預が）偽古文尚書蔡仲之命に「致辟管叔于商」とある記事によったがためであり、これが後人の偽増であることを知らなかったのである。（第一百一章）

前項からいっても当然のことながら、これによると閻若璩は、杜預の春秋経伝集解が作られたとき、既に偽古文が世に出ていたとするのである。

また、閻若璩は次のようにもいう

左伝哀公十八年に「夏書曰、官占唯能蔽志、昆命于元龜」とあり、杜注は「昆は後、つまり先に自分の気持ち（こころ）を断め、その後には龜を用いて占う、ということである」としている。

ところで陸徳明の見た偽古文は（經典釈文によると）「唯克蔽志」としていたようである。ところが孔穎達の見本は（左伝正

義によると) 今の太公望と同じく「能」を「先」としていた。してみれば、偽古文は杜預の後に出来て、杜注に従って左伝に引かれた夏書の「能」を「先」と改めて太公望に採り入れたのかといえ、そうではない。杜預の左伝集解は大康元年(二八〇年)に作られており、晋が天下を有してのち、既に十六年をけみしている。この偽古文は魏晋の間に出来たのであるから、その後に出た杜注を見たはずがない。私はおもりに、杜預以前の賈逵・服虔・王肅など、みな左伝注を作っている。きつとこれらの中に「先ず人の志を断め……」の説があつて、偽古文はそれに従つたのであろう。

# (第一百十九章)

偽古文太公望が、賈逵などの左伝解釈に従つて、左伝哀公十八年の記事に引かれた「夏書」をとり入れて作られたというのは、賈逵注などが現存しないので、あくまでも閻若璩の憶測にすぎないが、ここでもまた閻若璩は杜預以前に偽古文が存在したとするのである。

## その五

さきに梅賾についての項でも触れたように、閻若璩は梅賾の説として、論語集解の解釈が偽古文尚書と一致しないから、論語集解の作成者の一人である鄭沖は、偽古文尚書とはかわりがないとする、と紹介している。その後文に、閻若璩はこの問題についての自説として、次のようにいう。

(堯典) 正義には、晋書を引いて太保公鄭沖は古文を扶風の蘇愉に授けたとするが、この書を授けたのはその晩年のことであり、論語集解を奉呈した時と同じではない。集解を奉呈したのは彼がまだ魏の光祿大夫であつた正始年間(二四〇年—二四九年)、魏なお盛んなりし頃のことである。それに対して、この偽古文尚書

は魏晋の間に出来ているので、あらかじめこれを見ておいて、のちに論語集解にのせることは不可能である。だからこのこと(梅賾がいうように) 鄭沖は(ほんらい偽古文尚書とは無関係であるのに、あたかも偽作者の一人であるかのような) 無実の罪を着せられたとすることはできない。やはりこの偽書の伝授は鄭沖から始まるのである。(第十九章)

その他にも、閻若璩は繰り返して古文尚書が魏晋の間に出現したと述べる。第二十二章では、禹貢の孔伝の解釈は、魏晋の間の人の地理知識にもとづくといひ、第一百十三章では「書古文は魏晋の間に出来た、それより隔たること五十三、四年、東晋建武元年始めて朝に献上せられ、学官に立てられた……」といふ。建武元年(三一七年)より五十三、四年前は、まさしく魏・晋交替期に当り、閻若璩のいう魏晋の間とは、漠然とその頃をさすのではなく、文字通りの意味であることがわかる。

ただここで注意しておかねばならないのは、彼はこの魏晋の間に出来た偽古文尚書の伝授が鄭沖より始まつた、といふのであつて、それを偽作したのが鄭沖であるとは、決して明言していないことである。

このように、閻若璩は偽古文尚書の偽作者として、特定の人物の名を挙げることはしていない、といつてよい。彼が主張するのは、魏晋の間に何人かの手によつてこれが作られ、鄭沖によつて後代に伝えられ、五十数年を経て東晋の初め梅賾によつて献上され、遂に学官に立てられるに至つたということである。

ところで、以上みてきたような古文尚書の偽作者を推定する論議の中で、偽古文尚書の経文の偽作者と、漢の孔安国伝とされる、今

文系古文系を問わず、梅賾が献上した全経文に付けられた注解の作者との関係、さらには、各篇の冒頭に記されている序との関係、これらについてはどのように考えられていたのであろうか。

既に本稿の（上）でも述べたが、古文尚書に対して最初に疑問を投げかけたとされる呉棫は、古文尚書の序を無視して論を立てており、かつ彼の著述とされる「書序」には、「書序」という一篇があつて、序については独自の一家言を有していたかと思われるところに、序については、彼は古文尚書序を全く信じていなかったようである。また、これも既に触れたように、朱熹も孔安国伝というものを、西漢の文体ではないといひ、序も同様であると断じている。しかし両者ともに、偽古文尚書の経文までも偽であるとはいっていない。そのため、序・伝の作者と、経文の作者との関係については、態度を明らかにするには至っていない。

明の梅賾は、経文の偽作者として皇甫謐の名を挙げる。そして孔伝については、その著「尚書考異」周官の条で、次のようにいふ。

堯典の「允釐百工」に、孔安国伝は「工は官」と注し、「平章百姓」に「百姓は百官のこと」と注している。ところで偽古文周官には「唐虞稽古、建官惟百」とあれば、孔伝と全く一致する。よって古文経と偽孔伝とは一人の手より出たこと、疑うべくもない。

これによれば、皇甫謐が経文の偽作者ならば、当然偽孔伝も皇甫謐が作ったことになるが、果して梅賾はそこまで考えていたのだろうか。

この問題について、閻若璩はどのようにいうか。彼は朱熹の態度をとりあげて、「朱子は古文に対してはひそかに疑問を抱いていた程度であるが、孔安国の伝については、正面きつてそれが偽である

という。つまり、朱子は経と伝とが同一人物の手になることに、気づいていないのだ」（第一百十四章）というところからみれば、閻若璩もまた古文尚書経文と偽孔伝の作者は同じであるとしていたようである。

彼はその根拠として、次のようにいう。

召誥に「惟二月既望、越六日乙未」とある。望は十六日庚寅の日、この庚寅の日も数えて二十一日乙未までが六日である。つまり望日をも数に入れるように、その当日から数えるのが今文の書法である。ところが、召誥の孔安国伝では、この書法が理解できず、望を十五日として解している。これでは「越六日」ということができなくなるではないか。これと、偽武成篇の経文「丁未祀于周廟……越三日庚戌」とあるのは、同じ誤りである。このことから、古文と孔伝とは同一人の偽作であることがはっきりしよう。

#### （第五十三章）

ところで閻若璩は、他所では偽古文の作者と孔伝の作者とを、別人としているとしか考えられないような見解も述べている。

偽書はその時代の好尚を反映していることが多い。この偽書は魏晉の間の少し前に出たものである（から、当時の文章には、これと一致するものが多い）。三国志裴松之注に引かれている魏の明帝の詔に「山陽公深識天祿永終之運、禪位文皇帝」とあり、また「山陽公昔知天命永終於己、深觀曆數允在聖躬」ともいう。さらに三国志の陳留王奐紀には「咸熙二年十二月壬戌、天祿永終、曆數在晉……禪位于晉嗣王」とある。（これらはいずれも前王朝の命数が尽きたことをいっており）そこでは「永終」の「終」を、「畢・尽」と解している。大禹謨の「四海困窮、天祿永終」は（論語堯曰篇からとったものであるが、論語では「永終」を「永久に

福をうける」意とするのとは異なり）これら三国志注などに見えるのと同様、「天から授かったさいわいが、永久に尽きはてる」意としている。これは当時の風潮と一致するものである。（第一百三章）

この文も偽古文が魏晋の際に出たことを証明しようとするものである。と同時に、ここから閻若璩の偽古文と孔伝との関係についての見解の不安定なことをうかがうこともできる。

閻若璩の大禹謨「四海困窮、天祿永終」に対する上記の解釈は、彼が口を極めて非難する蔡沈の集伝に「四海之民至於困窮、則君之天祿、一絶而不復統」とあるのにむしろ一致している。それに対して孔伝は「為天子、勤此三者（天子の位、道德の美、天民の無告の者すなわち四海困窮）、則天之祿籍、長終汝身」といい、「天からの幸いが、いつまでも汝の身の上にあるう」の意としているのである。このように、閻若璩の考えに従えば、大禹謨の經文の意味と孔伝の解釈とは違っていることになり、ここでは、偽古文尚書の作者と孔伝の作者とは別人となってしまうのである。これは明らかに、彼が古文經と孔伝の作者とは同一人であると主張したことで、食い違っている。

何故このようなことが起るのか。実は「古文疏証」全体を見ると、この程度の矛盾撞着はしばしば起っている。その原因の一つに、この書物が長年月をかけて作られたものであることがあげられよう。彼が古文二十五編の偽に関心を寄せたのが二十才の時、著述に着手したのが三十才頃、第一巻が成ったのは四十八才のとき、そして四巻にまとめて黄宗羲の序文をもらったが、公刊には至らなかった。彼はそれ以後も古文尚書の偽をあばくことに熱中し、その死後、子の閻詠が四巻本以後の成果をも採り入れて八巻本としてまとめた。

さらにその後、閻若璩没後四十年にして、やっと上梓することができたのは、孫の閻学林の手によってである。

このような著作であるので、前と後とでは考えの変わることもある。閻若璩自身が全体を見渡して内容を整理して発表したものでもないため、ある程度の矛盾が含まれていても、やむを得ないであろう。

さて次に、閻若璩とあい前後する清の碩学たちの、古文二十五篇に対する見解を、閻若璩とのかかわりを考慮に入れながらみてみよう。

まず黄宗羲（一六一〇年―一六九五年）について。

彼自身は古文經、あるいは孔伝の作者について、とりたてて言及した文章は残していない。そこで閻若璩が「古文疏証」の中で、黄宗羲について述べているところからみてゆくことにする。閻若璩より二十六才年長の黄宗羲は、上述のように「古文疏証」四巻本のために序を書いた人物であり、閻若璩とは浅からぬ因縁の人である。「古文疏証」の中でも、しばしば登場し、曆法に関して、第八章では「黄宗羲太冲亦今知曆法者」なりと評されたり、第八章では閻若璩の隨筆「潜邱劄記」から引いた言葉として、春秋莊公十八年三月の日食が計算と合わないことについて黄宗羲が述べた見解が、「天をあざむき、人をあざむくこと甚だし」と罵倒されたりにしている。その曆法に関するところはさておき、古文尚書について、閻若璩はいう

天下の事は根柢よりして枝節にゆくは易く、枝節よりして根柢に返るは難し。窃かに以うに考拠の学もまた爾り。予の偽古文を弁ずるの喫緊は、孔壁に原より真古文有りて舜典・汨作・九共な

ど二十四篇たり。張霸の偽撰に非ず。孔安国より以下、馬鄭以上の伝習、尽く是に在り。大禹謨・五子之歌等二十五篇は、則ち魏晋の間に晚出し、安国の名を仮託せしものに在り。此れ根柢なり。此の根柢をば手に在るを得、然る後に以て二十五篇を攻むれば、其の文理の疏脱、依傍の分明、節々皆刃を迎えて解けん。然らずして僅かに子史の諸書を以て、仰ぎて聖經を攻むれば、人豈に之を信ずること有らんや。曾て寄せて黄太冲に与うるに、読むこと一過、歎じて曰く、原来兩漢の時に当りて、安国の尚書、学官に立たずと雖も、未だ嘗て私かに流通せずんばあらず。永嘉の乱に逮びて亡び、梅賾偽書を上りて冒すに安国の名を以てす。則ち是れ梅賾始めて偽れり。顧うに後人併せて漢の安国をも疑う、其れ可ならんや。以て史伝連環の結を解く可しと。（第一百十三章）この章の後半は、閻若璩の書信に対する黄宗羲の返書のようにであり、彼は閻若璩の影響によって偽古文の偽への認識をもち、その偽作者を梅賾と考えたようである。

次にもう一例、「古文疏証」で黄宗羲について述べられたところをみてみよう。

按ずるに一人の議論で、先と後で正反対に異なることがある。黄太冲は嘗て言うに、聖人の言葉はその文の表現ではなくて、その内容・義理が大切なのだ。義理に欠点がなければ、表現は問題ではない。大禹謨の「人心道心」の言葉は、どうして三代以下の人に偽作できようか、と。それが後になって私の疏証<sup>④</sup>兩卷に序をつけたときには、「人心道心」は荀子にもとづいている。まさしくこれは荀子の性悪説の根元である、といっている。また、この十六字は理学の害の最たるものである、ともいう。なんとその言うことが相反することよ。

また彼の孟子師説の中的一条にいう。武成篇では「甲子昧爽、受率其旅若林、会于牧野、罔有敵于我師、前徒倒戈、攻于後以北、血流漂杵」とある。これによると商人たちが互いに殺しあつたことになる。ところが孟子（尽心下）では「至仁を以て至不仁を伐つ、何ぞ其れ血の杵を流さんや」という。これは明らかに武王が紂を殺したことを言うものであつて、前者とは相反している。そこで孟子の見た武成篇は、古文の武成とは別物であることがわかる。古文の偽の一つの証拠である、と。実はこの説は、梅賾が既に論じたものと一致している。（第一百十九章）

ここでも、閻若璩の言うところによると、黄宗羲はその初め、古文を疑うことに明白な態度をとらなかつたが、閻若璩の見解を知るに及んで、考えを改めるに至つたことになる。

続いて顧炎武（一六二三年～一六八二年）について一瞥しておく。彼は日知録卷二泰誓の項でいう

商の徳沢は深し、尺地も其の有に非ざる莫く、一民も其の臣に非ざる莫し。武王、紂を伐つて乃ち曰く「独夫受、洪いに惟れ威を作し、乃ち汝の世讎なり」と。曰く「肆に予れ小子、誕いに爾衆士を以て、乃の讎を殄殲せん」と。何ぞ此に至らんや。紂の不善も亦た其の身に止まる。乃ち其の先世も併せて之を讎す。豈に泰誓の文、魏晋の間の人の偽撰する者に非ずや。

ここで彼は偽古文泰誓の偽を明言して、魏晋の間の作だとする。また、古文尚書の項では「今の尚書は今文も古文も入っているが、うち三十三篇は伏生や安国の文を雜取したもの（で漢代伝来の本物）であるが、二十五篇の梅賾より出たもの、舜典冒頭の姚方輿より出たものも合わさつて一つとなつてゐる。（このように真も偽も入り

混じっているからには) 孟子がいう『尽く書を信ずれば、書なきに如かず』とは、今日ますますその通りだと確かめられる」として、古文二十五篇を偽としている。また書序の項でも現行の各篇の頭に付せられた序は、後人の偽作であるという。

このように、顧炎武の姿勢は極めて明快ではあるが、ただ、彼はそれら古文二十五篇及び、その成立の事情を述べた序などの偽作者は誰かとなると、その人を推定することはない。

ここで、顧炎武の姿勢は明快である、といったが、ところが閻若璩は、次のようにもいっている。

私が顧寧人に壬午(一六七二年)の冬に会ってたずねた。古文尚書は疑うべきか否か、と。彼の答は、否であつた。してみると、この見解(日知録にある泰誓は魏晉間の人の偽作だとする説)は、彼の晩年に悟つたものであろう。しかし彼の態度には、依然としてどっちつかずのものがある。(第九十八章)

顧炎武のどのような所がどっちつかずなのか、これだけではよくわからないが、たとえば、日知録の中には、偽古文の五子之歌・胤征・伊訓などの文章について、それがそこに書かれた当時の事実として論じられていることがある。偽作されたものならば、その内容は事実として論ずるに値しないとするが、閻若璩の立場であらう。それから見れば、顧炎武はやはりあいまいな態度といえようか。

次に、閻若璩のやや先輩に当る朱彝尊(一六二九年―一七〇九年)の偽古文尚書に対する意見はどうであつたか。

彼には「尚書古文弁」なる著述があつて、そこで古文尚書に対しての見解を述べているが、それも検討するに先だつて、閻若璩が朱

彝尊について語っているところを「古文疏証」の中からみてみよう。

朱錫鬯が余に告げるに、(明人)雲南の楊士雲は弘山集を著わし、その中に読尚書詩があつて「二十八篇の今、漢の伏生自り授かり、二十五篇の古、晋の梅賾に至つて奏せられる。二十八宿の外、二十五宿又たあり、仲尼作る可からず、誰か百篇の旧に復すや」というのと、(南宋)呉草廬の伏生授書図に題するの詩に「先漢の今文古く、後晋の古文今なり。若し伏氏の功を論ずれば、遺像当に鑄るに金をもつてすべし」というのとは、いずれもその表現はあからさまでなく、君たちのように露骨には古文を攻撃していない、と。

私は笑つていった。詩は遠まわしの表現が多く、文は直接的にいうものだ。試みに呉草廬の尚書叙録を見れば、はっきりと(今文と古文の)二つに分けて、混淆しないようにしているではないか。その見識は(古文今文の違いに気付きながら、明確な態度を打ち出せなかった)朱子の右に出るものであつて、絶句を作つた時とはわけが違ふ、と。錫鬯は黙つてしまった。近頃彼は「経義考」を撰したが、徐々に私の影響が及んでいるようだが、まだまだ不徹底である。(第一百十四章)

そこで、次に朱彝尊の古文尚書についての見解が、いちおうまとまつた形であらわされている「尚書古文弁」(曝書亭集卷五十八)を見ることが出来る。

彼にはその中で、古文尚書伝承の系譜を、ほぼ次のように述べている。

漢の孔安国が孔子旧宅の壁中より出た古文尚書を得た。それを伏生所伝の二十九篇とつき合わせると、十六篇多かった。それを弟子に伝えたが、司馬遷もまた安国について学んだので、史記の



中に引かれた尚書の文は、いずれも安国より教わったものであるから、孔壁出土の真古文尚書である。しかしながら、彼が史記に載せた文は、伏生所伝の二十九篇と一致するもの以外には、湯誥百三十字と、太誓九十七字があるのみである。これは、安国が新たに得た十六篇は、いまだ詔旨を得て博士官に立てられ弟子を置くに至っていないだったので、安国は敢て誰にも伝授していなかったためである。

という。そしてこれを基本的認識として、以下、後漢から魏・西晋の諸儒、いずれも孔安国の伝えた古文を見ていない、とする。その中で、堯典正義が引くところの、鄭冲から皇甫謐を経て梅賾に至る古文尚書の伝承については、まず鄭冲について、彼が高貴郷公に尚書を講じたとき賞賜があったが、もし孔安国増多の書を持っていたならば、それを提出すれば立身は思いのままであっただろうに、それをしなかった。また、孔邕・曹羲・荀顗・何晏たちと共に論語の訓注を集めて奏上したが、彼はなぜ孔安国伝の尚書は、こっそりと弟子の蘇愉だけに伝えて天子に進めなかったのか。

さらに、論語の集解は何晏の名をつらねているが、実際は鄭冲が中心となっていた。だからもしこの古文尚書を手に入れているならば、「或謂孔子」の章（為政篇）で、ただちに尚書君陳篇の句を引用することができたはずであり、何も包咸の「孝乎惟孝、美大孝之辞」などを用いる必要はなかったのである。してみれば、鄭冲もまた孔安国伝の古文尚書を見ていなかったであろう、と結論する。

さらに皇甫謐についても、幾つかの帝王世紀と孔伝との食いちがう点を指摘して、皇甫謐もまた古文尚書を見ていない一人とする。

そして、

然らば則ち、増多十六篇、漢自西晋に迄るまで見る者有るな

し。一旦、東晋の初め古文五十九篇俱に出で、并せて孔氏詔を受けて作る所の伝を得たり。学者踴躍して快を称せざる者有らんや。諸儒、或いは大義を説き、或いは義疏を成し、或いは音義を釈し、唐を越えて汴宋に及ぶまで、敢て軽がるしく擬を加えるもの莫し。といひ、そののち、南宋に至って朱熹がはじめて疑ひ、それを発展させて呉棫・趙汝談・陳振孫の諸家があるが、甚だしきには至っていない。さらに元の呉澄、明の趙訪・梅鷟。鄭瑗・帰有光・羅敦仁たちは、偽古文を攻めて余力なし、といっている。

更に続けて

蓋し徐邈、尚書逸篇三卷に注して自り、晋人因りて綴輯する遺秉滯穗を捨てて以て飯を作り、雉頭狐腋を集めて以て裘を為るが若し。大義に于いて乖う無く、而して遺言取るに足り、以て攻むる無かる可きに似たり。

ともいう。ここに朱彝尊の立場は明瞭に示されており、経文に関しては、古文尚書といえども、その価値は決して否定さるべきものではなく、それは古典籍に散在する尚書の断片を集めて、もとの形に復元を試みたものであって、その本質において、本来の尚書と同じであると見做している。

ところが彼は、孔伝については幾つかの問題点をあげている。

#### その一

孔安国は論語にも注しており、堯曰篇の「予小子履、敢用玄牡……」以下の句について「これは桀を伐とうとして、天に告げたときの言葉である。……墨子に引く湯誓も、その言葉は同じである」というが、尚書の孔伝は湯誥の言葉として解釈し、夏に克った後のものとしている。

その二

同じく論語堯曰篇の「雖有周親、不如仁人」の句に、孔安国論語注は「親しくても賢でなければこれを誅するのである。管・蔡がそれである。仁人とは箕子と微子をいい、向うからやって来れば、これを用いてやる」とする。それに対して古文泰誓中篇の同じ言葉に、孔安国の伝は「紂には至親が多にいるが、周家の僅かの仁人には及ばない」と解している。尚書伝と論語注とは同じ孔安国一人の手になるものとされながら、このように異なった解釈が出るのは、どうしたことか。

その三

史記股本紀に「殷之太師少師、持其祭器奔周」とあり、周本紀には「紂殺比干囚箕子。太師疵・小師強、抱其祭器奔周」、宋世家には「微子數諫紂、紂弗聽。及去未能自決、乃問于太師少師。太師少師勸微子去。逐行」とある。

今文の微子篇の父師・少師は、そのように呼ばれる人がいたはずである。そして司馬遷が孔安国から尚書の学問を授けられたのであるから、その説は必ず安国にもとづいているに違いない。ところが現在の孔安国尚書伝では「父師は太師で、三公であり、箕子のこと。少師は孤卿で、比干のこと」としている。

そもそも三仁はいずれも殷の王子である。父師が若し箕子であるならば、殷の人は質を尚んだから、兄の子に語りかけるとき、きつとその名を呼んでいたはずである。ところでここは父師（太師）の疵の口から語りかけられているから、微子を称して「王子」といつているのである。（これは尚書微子篇に「父師若曰、王子」とあることについて述べているのである。）

班固の漢書古今人表にも、太師疵・少師強の名があり、太師や少師の姓名は古くから伝わっているものであって、それが箕子や比干であるはずはない。孔伝に偽託した人は、そのことを知らなかったのである。（ここでも孔安国に学んだ史記の記述と、尚書の孔安国伝とに食い違いがある。）

以上、見てきたように、朱彝尊は偽古文経については、その価値を認めようとしているが、孔伝は漢の孔安国のものとは全く違うものとする。ただ、彼が論語の孔安国注をもって、尚書の孔安国伝を否定しようとするところは、論語孔安国注そのものが果して真に漢の孔安国の注かどうか、疑わしいので、確たる根拠にはなり得ないであろう。そしてまた、彼はその偽孔伝の作者を誰とするかについて、何も言明することがない。

右のような彼の態度は、そのままその主著「経義考」にもあらわれている。

「経義考」を見るに、その「古文尚書」の項では、明以前の諸学者の、古文尚書に対する見解を羅列した後に、自説をのべて、

近ごろ山陽の閻百詩氏は「古文尚書疏証」を作り、疵を吹き糺を摘すること密を加う。それに対し肅山の毛大可氏は「古文尚書冤詞」を著してその濡れ衣を雪がんとしている。両者の見解をつき合わせると、公輸盤が攻めて墨翟が守るようなものである。（いづれにも軍配を挙げ難いの意か）

そもそもこの書は、学官に久しきにわたって立てられており、その言葉は逸書を集めて文を成しており、理にもとるものではなく、本物ではないが否定し去るべきものでもない。といっている。また「経義考」の孔氏尚書伝の項では、幾条かの

孔安国伝に対する疑問を述べ、孔安国の名に託して提出された書の序は偽であると明言し、さらに許慎・譙周・王肅たちはいずれもこの後出の孔伝を見ていないという。また鄭冲についても「尚書古文弁」と同じ論を展開して、この偽孔伝とは無関係とし、皇甫謐について、堯典正義に引く晋書では皇甫謐は姑子外弟の梁柳から古文尚書を得たので、帝王世紀には往々孔伝五十八篇の文を載せているといっているが、実際には帝王世紀と孔伝との間には多くの異なるところがあると指摘して、どうやら鄭冲も皇甫謐ともに偽古文も孔伝も見えていないようであるとする。

ところで、先に記したように閻若璩が「古文疏証」で、「経義考」の古文尚書に対する態度が不徹底である、というのは、恐らくは朱彝尊が古文経文については、その価値をある程度認めようとすることをとりあげて、そのように批判するのであろう。

また朱彝尊の説に、閻若璩の影響が及んでいるのかについて、もちろん朱彝尊が閻若璩の説を参考にしたことは事実であろう。しかしその程度の大きさについては、何とも言いかねるものがある。それとは別に、閻若璩の学問に対する姿勢を示す次の言葉より見れば、上記の朱彝尊あるいはさきの顧炎武の態度は、容認されるべくもなからう。

蓋し以へらく、天下の學術は真と偽とのみ。偽者苟くも存すれば、則ち真なるもの必ず蝕まるる所と為らん。譬うれば猶お稂莠の嘉禾を害するがごとし。必ず鋤して之を去りて方めて良農と為る。（古文疏証第一百二十章）

上述のように、閻若璩の先輩に当る清初の三碩学、程度のほどはともかくとして、何らかの形で閻若璩の影響を受けて、偽古文尚書

および偽孔伝が偽であることに目を向けている。こうして、現行尚書のうち古文系統とされる二十五篇を偽とすることが常識化されていったのである。

（未完）

（昭和六年九月一六日 受理）

## 註

- ① 梅賾は、枚賾、梅頤などと書かれることもあり、いずれが正しいか不明である。本稿では、いちおう梅賾で統一しておく。
- ② 「尚書古文疏証」は全八巻、百二十八の部分より成る。この部分を（上）では「条」であらわしたが、本稿では「章」で統一する。他に「節」とするもの（陳夢家「尚書通論」）などもある。
- ③ 閻若璩は古文尚書梅賾偽作説をとると誤解されることが多いのである。その一例として、陳夢家「尚書通論」がある。氏は閻若璩も惠棟もいずれも古文を梅賾が偽造したものとしているとして、その根拠に「尚書古文疏証第一二三節曰、梅頤上偽書、冒以安国之名、則是梅頤始偽。古文尚書考曰、今世謂古文者、乃梅頤之書、非壁中之古文也」をあげ、二氏はこのことについて、いずれも詳細な考証はしていない、という。惠棟の「古文尚書考」については、しばらく措くとして、「古文疏証」の、いま陳氏が問題とした箇所は、実は閻若璩の言葉ではなくて、黄宗羲の意見なのである。本稿の黄宗羲について述べたところを参照されたい。
- ④ いずれも爾雅釈獸にある。「駘如馬一角、不角者駘。注、元康八年真郡獵得一獸。大如馬一角、角如鹿茸」燠黑虎。注、晋永嘉四年建平枳縣獵得之。狀如小虎而黑」
- ⑤ 第二に、それ以後も鄭玄注が存在したのに、唐初に孔穎達が疏を作り、これを世に信ぜしめたこと。第三に師説を無視して蔡沈が集伝を作ったことをあげている。
- ⑥ 杜注「周公称王命以討二叔也」
- ⑦ 杜預は、ここでは明言していないが、この「能」字を「先」と解して

いると、閻若璩は判断しているのである。

⑧ 本稿（上）三九頁。

⑨ 三国志文帝紀に漢帝が魏王（曹丕）に禪位する冊文がある。そこでは「天之曆數在爾躬、允執其中、天祿永終……」という。この意味は、天のさいわいがいつまでもそなたの身の上にあり……となる。よって、閻若璩のいうように、時代の好尚が、「永終」を「永久に終る」と解しているとは、限らないようである。

⑩ 「古文疏証」の中で、蔡沈の「書集伝」を難するところ、数えきれないほどである。一、二の例をあげれば、「余は嘗て譬えたことがある。蔡氏はさながら今の子供が小題時文を作るようなもので、字眼をひっくり返して新しがついている。經字とは関係ない」「蔡伝の誤りを正そうとすれば、落葉をはけばはくほど出て来るようなものだ」など。（第九十四章）閻若璩はとりわけ地理上の問題について、蔡沈の注を全く信じていない。

⑪ 全祖望の「鮚埼亭集」巻十一、梨洲先生神道碑文によると、「授書隨筆」一卷は、淮安の閻徵君若璩が尚書について問うたのに答えたものである、という。江藩の「漢學師承記」もその説を踏襲している。現在この「授書隨筆」なる書は伝わらないので、断言はできないが、むしろ黄宗羲が閻若璩の影響をうけて古文尚書に対する見解を改めたと考えられるところからみて、この「授書隨筆」一卷に、とり立てて古文を疑ったりする内容があったとは思われない。

⑫ このように、嘗て師と仰いだこともある黄宗羲をのしつたりするところから、閻若璩の人格に疑問が持たれるのである。錢穆「中国近三百年學術史」など。

⑬ この文は、黄宗羲の「古文疏証序」にさらに詳しく述べられている。なお註③で陳夢家が閻若璩が梅賾偽作説をとっているとする根拠としたのは、この文章である。しかし「古文疏証序」ときき合わせるまでもなく、これは黄宗羲の意見を述べたところである。

⑭ この「尚卷」とあるのは、「四卷」の誤りであろう。

⑮ 吳澄（草廬）については、（上）三七頁参照。

⑯ この問題については、すでに梅鑑が論じており、本稿（上）三八頁でも触れているように、とり立てて目新しい意見でもない。また閻若璩のこれに対する見解は、本稿でも紹介している。

⑰ 吳棫が朱熹の後の人であるとするのは、明らかな誤りである。本稿（上）三四頁参照。